

会党への系譜、日本型左翼社会民主主義者の指導する党であつた。今日の日本共産党は、その「解党」の後に、スターリン指導下のモスクワ製政策・規約を擁してその遺産を篡奪し、再出発したものであつた。

これは、徳田球一らの党史改竄を告発した加藤哲郎が最後にたどり着いた結論であつた。何年か前、この一節を読んだ私は、その発言の余りの大胆さに驚くと同時に、加藤の中にある「革命的浪漫主義」にいささか感動したものである。彼は、共産主義運動が世界レベルで壊滅したにもかかわらず、明治社会主義に息吹いていたはずの社会民主主義の可能性を第一次共産党の中に懸命に見出そうとしていた。

しかし今、著者によって明らかにされた、第一次共産党人が何度も挑んだコミンテルンとの到底勝ち目のない闘いの全貌を見て、私はまた別の感動にとらわれる。彼らは、運動史の脱落者であり、党の草創期から一貫した「転向者」に他ならなかったのではないかと。そうした事実が、私に、加藤の結論に対して感じたものとは別種の感慨を抱かせる。彼らの転向は、一九二九年の中野重治に少しばかり似ている。のみならず、彼らは日本浪曼派の深淵を覗き込んだ竹内好や橋川文三の思想的な先行者でもあるようだ。その営為は、一九五五年の六全協決議を思想的に無化してしまうような、日本思想史の「通奏低音」（丸山真男）として、今も私たちの心を揺さぶるのである。

（神戸大学教授）

平野敬和著

『丸山真男と橋川文三』

——「戦後思想」への問い——

（教育評論社・二〇一四年）

河野 有理

先年物故した赤瀬川源平に「皇紀二千六百三十二年大日本国主帝国論壇地図」なる作品がある。一九七三年の雑誌『現代の眼』新年号特別付録。製作は櫻画報社で、「アカイ／アカイ／アサヒ」で物議をかもし、『朝日ジャーナル』を自主回収と休刊騒ぎに追い込んだあの「櫻画報」のいわば続編である。『朝日ジャーナル』を、本体である櫻画報を包む「雑誌状の物」に過ぎないと主張した彼らにしてみれば、無論、『現代の眼』の方を「附録」と呼ぶのが正確だろう。この時期、櫻画報は様々な媒体をその「包装紙」ないし「附録」として「ジャック」しつつ、刊行されていた。

『丸山真男と橋川文三』——「戦後思想」への問い——という書名を見たとなん、思い出したのがこの「論壇地図」だった。真ん中上方には天皇一家が、そのすぐ右には先年二月に帰国した横井庄一と、そして左にはすでに搜索が始まっていた小野田寛

郎をめぐる状況が描かれる。すこし視線を下げると、中段右には「日中友好パンザイ」、左には「(沖縄の本土…引用者) 復帰パンザイ」を叫ぶ言論人が配されている。以上の上段が天国篇とすれば、あさま山荘事件をはじめとする過激派学生の「内ゲバ」が描かれる中央から下段にかけては地獄篇の様相を呈し、左には「警察パンザイ」、右には「革命の暗黒」という吹き出しが躍る。一九七〇年代初頭の世相と論壇を宗教画あるいは曼荼羅状の一枚絵として表現したとおぼしきこの「地図」の、一番下段の左方をよく見ると、若冲の絵に出てくるような白象の牙に乗って、騒然とした状況に我関せず焉を決め込んでいるかのように見える一群の学者に気付く。その中に、丸山眞男と橋川文三が仲良く隣り合って座っている。

それにしてもなぜこの二人なのか、と初見の際は不思議に思ったものである。丸山の左隣には加藤一郎がいてこの並びは腑に落ちる。その下の段は吉川幸次郎、桑原武夫、多田道太郎、山田宗睦、梅原猛ととてもわかりやすい並びである。橋川の右隣りは大内秀明なのだがこの場合はその隣の宇野弘蔵と一組であろう。してみるとやはり丸山・橋川と宇野・大内が対比されているということなのだろうか。

「丸山学派」という意味では橋川と同じであるはずの神島二郎ははるか右上の横井庄一帰還騒ぎの狂騒の中に見える。この時期、本書でも指摘があるように、橋川にとってある意味では丸山より大きな存在であっただろう竹内好は、そのすぐ下、日

中友好をめぐる状況の中心にいて竹内実と論争している。三島と橋川と同じ「戦中派」であった吉本隆明は、大映映画『大魔神』の扮装をさせられたうえで、中段の中央に屹立している。

この時期丸山は、加藤一郎とともに収拾にあたった東大紛争で心身ともに疲弊を来し肝炎で入院(七〇年)、定年を待たずに東京大学法学部教授の職を辞し(七一年)、自宅で療養を余儀なくされていた。七二年には「歴史意識の「古層」」を発表するものの、これは『日本の思想6 歴史思想集』の解説として公表したものであり、この時期の丸山の仕事は叢書や全集などの編集や解説執筆が主であった(『年譜』増補新訂版『丸山眞男集』別巻所収、「教授・助教授個人の活動」『丸山眞男集』別集第三巻所収参照)。その知名度(悪名?)はともかく「論壇」の中心にいたとは言い難い。他方、橋川の方はといえば、「昭和維新試論」の連載を『辺境』に、「黄禍物語」の連載を『中国』に持っていたほか、全国紙に三島由紀夫の自決をめぐる論考を連載、さらに『朝日ジャーナル』『情況』『現代の眼』『文藝春秋』『展望』といったいわゆる論壇誌に対談やインタビューを含む様々な形で登場していた(『年譜』『思想の科学』一九八四年六月臨時増刊号「橋川文三研究」所収)。丸山に比べてはるかに「論壇」の人だったのは橋川の方であった。一九七三年の時点でこの二人の取り合わせにそこまで強い必然性を感じないのも確かなのである。

もつとも、丸山眞男についての専論が一通り出そろい、『丸山眞男プラス誰か』という形に移行してきたように見える昨今の研究潮流を眺めれば、「丸山と橋川」という組み合わせがいままでなかったのは、やはり意外に思える。「丸山と平泉澄」「丸山と三木清」「丸山と廣松渉」という組み合わせよりはそれは確かに自然に見える。(丸山はこうした表現を嫌っただろうが) 実質的な「師弟」関係と、日本政治思想史という狭義の専門の同一性と、それにも関わらず看取されうる研究対象と方法(とさらにはその「超学問的動機」や性格や気質)についての明らかに違いというテーマ群が、読者にも素直に了解されるだろうかである。この「ありそうでなかった」組み合わせに先鞭をつけたという意味で本書の意義は大きく、今後の同種の業績のベンチマークとなると言えよう。

とはいえ、率直に言えば評者は、本書を「思想史」の業績として取り扱うのには躊躇を感じる。「丸山と橋川」という組み合わせによって想起される上記テーマ群についてそれなりに言及されているとはいえ、著者はこの二人について「思想史」的に適切なコンテキストの下で叙述しようという狙いを、そもそも有していないように思われるからである。本書は、著者の言葉を借りるならば、「戦後日本における批判的知の枠組みが急速に崩壊した現在」(一頁)という状況認識——その「批判的

知の枠組み」を「相互補完的に規定」してきたのはマルクス主義と近代主義だとされる——を前提としたうえで、「戦後思想」という「思想的遺産」が有している「批判的精神の可能性」(二二九頁)を探ろうとするものである。その意味で「思想史」の書というよりは「思想書」であることを——丸山や橋川を「思想史家」ではなく「思想家」として扱うことに対応して——目指しているのだらう。平たくかみ砕いていえば、本書の狙いは、丸山と橋川の「戦後思想」を現状に対する薬にしようというものであると思われる。といっても、もちろん手放しの礼賛ではない。著者の効能書を、これまたかみ砕いて表現するならば、丸山については「良薬であるがその副作用に注意」であり、橋川については「飲み下しがたいところがあるが良薬」というものだろう。総じていえば、「丸山の薬効が及ばない範囲を、橋川の薬効がカバーしている」という構成になっているものと思われる。

三

彼らの「戦後思想」が含まれているという「批判的精神の可能性」について、著者が下した評価の妥当性について云々することは、端的に評者の能力を超えている。また、「思想史」学会の学会誌という性格にもなじまないであらう。以下は、なぜそのように考えるのか、その理由を述べたい。

「思想史」の研究書として本書を読むことが困難な理由は、

まず、本書の「思想史」研究上の独自性の評価が困難なことである。「戦後思想」という問題設定とその定義。丸山と橋川の間にある世代の差と「敗戦感覚」の違い。丸山の天皇観の変遷とオールド・リベリストとの決別。丸山の原爆体験。丸山の思想史方法論のタテの思想史からヨコの思想史への展開。「古層」論が陥った隘路。『日本浪曼派批判序説』のコンテキストとしての一九五〇年代の「ナシヨナリズム」論と竹内好の重要性等々。本書で触れられているこうしたいわば「思想史」的叙述を構成する知見については、著者自身が正確かつ誠実に本文や注で言及されているように、小熊英二、鶴見俊輔、孫歌、松沢弘陽、荻部直、石田雄、丸川哲史（敬称略、順不同、以下同じ）等々が指摘してきた事柄であった。本書は基本的にこれらの業績を祖述しているか、あるいはこれらの業績が設定した前提から導かれる帰結を記述しており、そこに新たなものを付け加えているようには見えない。新しい丸山像や橋川像が、あるいは二人の関係についての新たな視角が提示されているとは思えない（もちろん、評者の読みが浅いのかもしれない。その場合は不明を恥じるのみである）。

また次に、著者自身が丸山や橋川のテキストを吟味する際に用いている物差しが検証不能なものである点である。たとえば「内在」「外在」がそれである（ほかにも「立場性」という概念もあるがそれはここでは措く）。著者は「内在的」「外在的」というタームを駆使して、議論を展開される。これらの概念は単

に記述的なものではなく——たとえばそれは知識の正当化にかかわる認識論的立場の名称ではない——、明確な価値判断を含んでいる（「内在」は善であり、「外在」は悪である）。結論を言えば、丸山は「外在的」であり、橋川（あるいは橋川に影響を与えた竹内）は「内在的」である。たとえば、著者によれば、「丸山の思想史研究」では、「どのような形で日本の「超国家主義」＝ファシズムが誕生したのか、という問題に関する内在的（傍点評者、以下同じ）な分析がなされていない」（九七頁）という。また、その「近代国家」論では「日本の近代化が必然的に植民地帝国として膨張する過程でもあったこと」がやはり「内在的に」問われていないのだという（九五頁）。いかにすれば「内在的」たりうるのか評者には測りかねるが、こうした「内在」の欠如と、「戦中の丸山」が「植民地帝国の枠内でものを考えて」（五七頁）おり、「帝国日本のアジアへの膨張がアジアのナシヨナリズムとどのような形で折り合うのか、という問題関心」が「希薄」であり（五四頁）、「植民地帝国の支配秩序をその内部から切り崩す論理を持たなかったこと」について「戦後も正面から問」おうとしなかった（二二四―二二五頁）という著者の丸山への辛い評価とは、連関しているものと思われる。他方で、竹内と橋川に対する評価は高い。例えば「戦後のマルクス主義や左翼から否定された歴史的对象を、その内部から分析することはどのようにして可能か、という問題関心」（一八九頁）と、「帝国支配と冷戦構造がある種の差異を含んだ連続

性の様相を呈しているという状況認識」を持ち、「抵抗する原理としてのアジア的原理」を「自己のうち、に再確認」（一九〇頁）し、「近代の超克」論をはじめとする日本近代の体験を批判する視座を獲得するために、その画義的な側面に内在して問題を発見」（一九三頁）しようとした竹内好の姿勢は、「ロマン主義の近代批判のあり方に内在して、その現在性を問う」という橋川の立場に「受け継がれ」たという（同頁）。

四

だがそもそも、ここでいう「内在」とは何のことなのだろうか。どのようにすれば「内在」したことになるのだろうか。ある論者が「内在」しているかどうかの判断基準は、観察者の主観や印象以外に存在するのだろうか。例えば、歴史を必然的な「法則」や「公式」が支配する「科学」とし、そうした一般法則の演繹や包摂、当てはめによって過去や現在を分析できると信じ——なるほどいかにも「外在的」である——主張していた同時代のマルクス主義者を想定するならば（そう不自然な想定ではないと思われるが）、ともに上部構造の独自性を問題にする「思想史」研究者であった丸山と橋川の「内在」度合いに大した差異はないともいえよう。そこをあえて二人のうちどちらがより「内在的」か判定するとしたら、その尺度は何だろうか。あるいはなるほど、江藤淳や吉本隆明が丸山について「外在的」とかそれに類する非難を投げつけたことがあるのは確か

であろう。だが、江藤や吉本が「丸山の分析は外在的だ」と主張したことと、実際にそうであるかどうかは当然に別問題であろう。また、丸山が「西洋近代」を規範的な意味においても、あるいは歴史を記述する際のある種の理念型としても用いていたことは事実だろう。それをもって、丸山＝西欧派＝外在的という連想が働いているのだとすれば、磯田光一が橋川の文章に感じた「ヨーロッパの政治学の影響」「マックス・ウェーバー、カール・シュミット、カール・ポパー、ノーマン・コーンなどの錯綜した影」を同様に考慮に入れないと公平を欠くであろう（磯田光一「西欧派の面貌」『磯田光一著作集六月報』参照。なお丸山が低く評価した橋川のこうした側面について、丸山が読みえなかった資料を用いて再評価を試みているのは宮島繁明『橋川文三——日本浪漫派の精神』第四章である）。

また、ある論者について「内在的」か否かを問うという姿勢はそれ自体が果たして「内在的」な議論なのだろうか。たとえば、本書は丸山と橋川を「戦後思想」としてとらえる。そしてこの「戦後思想」とは、小熊英二いうところの「戦争体験の思想化」なのだという。小熊が歴史社会学者としてこうした視座のうちに「戦後思想」を見事に整理したのは事実であろう。だがこの視座それ自体は、膨大な数の知識人や思想家を整理するために外挿された、その意味で、外在的な視角であることは忘れるべきでないだろう。「あの戦争」が同時代の多くの人々にとって人生の重大事であり、また多くの知識人にとって

思想的事件であったことは否定できない。だが、その人の人生や思想において「あの戦争」がどれほどの重みをもった出来事なのかは、それこそ年齢やおかれた状況によって、大きく異なりうるはずである。

著者は、結局、「戦争体験の思想化」を「戦後思想」の核心にとらえ、自らの「体験」に向き合う姿勢（自己省察？）の真摯さの度合いを「内在的」という言葉にこめて、「戦後思想」の質を測る試金石として使用されているのではないか。そのうえで、竹内や橋川の方が「自身の体験」の「思想化」に成功している分だけ「戦後思想」として良質だという結論をすらし、出しかけているように見える。しかし、著者も指摘されるように、丸山自身は「体験」をストレートに振り回すことを「ナルシズム」として唾棄した。上にあげたような戦争がもつ意味の比重の多様性、さらには「体験」を安易に「思想化」することを禁欲した丸山のケースに表れているような「体験」と「思想」の関係性自体の多様性に鑑みるならば、「体験をいかに思想化しているか」という評価軸自体が、きわめて「外在的」なものといえてしまうのではないか。著者自身は姜尚中の丸山批判を引きつつもそれが「外在的」超越的な視点から裁くことにならないか」と危惧されているが（二七二頁）、その危惧はご自身の議論にも当てはまるのではないだろうか。

丸山はかつて自著に対して「このことが書いていない」と指摘する書評が多いことを嘆いていた（『自由について——七つの

問答』、三九頁）。「丸山には見えなかったこと」「丸山が語らなかったこと」によって丸山と橋川を比較するのは、丸山にとってフェアではないだけでなく、「橋川の語ったこと」を「丸山の語らなかつたこと」に引きつけて解釈する危険を有する点で、橋川論としても不幸なのではないか。

五

最後に蛇足。二〇一四年刊行の本書であるが、最新の先行研究として著者は二〇〇六年刊行の米谷匡史・道場親信「丸山眞男を読み直す——その論点と可能性を」（『KAWADE 道の手帖 丸山眞男』）を紹介される。曰く、「現在、丸山のテクストについて読み直されるべき論点が、的確に整理されている」。なるほどその通りであろうが、丸山をめぐる資料の状況は二〇〇六年当時と現在とを比べると格段に進歩している点には、注意が必要である。丸山の図書草稿類が一括して寄贈された東京女子大学図書館丸山眞男文庫では、草稿類を二〇〇九年から公開（二〇一五年からはウェブ上でも検索および閲覧可能）している。その成果は、同文庫のセンター報（ウェブ上で入手可能）や、二〇一四年から刊行が始まった『丸山眞男集』別集として刊行されつつある。著者が本書であげた論点、例えば丸山と孫文との関連——丸山が「その内側から、内面的に把握せねば」（『集』②——二七一頁）と述べた孫文について「孫文と政治教育」なる題目で行なわれた講義が『別集』第一巻に収められている——、

あるいは丸山の思想史方法論の転回の始期について——たとえば記紀を講じ始める時期について平石直昭「丸山文庫所蔵の自筆講義ノート（五〇年代後半）について」（センター報第八号、二〇一三年）は従来の説に修正を迫っている——は、こうした成果によってさらに深めることができると思われる。また、橋川文三についてはその旧蔵書が慶應義塾福沢研究センターに一括して寄託されていることが知られていたが（『橋川文三旧蔵書書目録』として刊行）、同センターには「橋川文三旧蔵資料」として日記・ノート類も保管されているとのことである（前掲宮島繁明『橋川文三——日本浪漫派の精神』は、この旧蔵資料を博搜したうえで、丸山が作り上げた「橋川イメージ」を覆そうと試みる意欲作である）。また、丸山文庫にも少ないながらも橋川関係資料が所蔵されている。本書が切り開いた「丸山と橋川」という肥沃なテーマについての思想史研究は、上記の資料水準を踏まえて行われるべきであろう。

（首都大学東京准教授）